暮らす旅　京都

目利きが育てる古都の手技

文／松岡伸吾（暮らす旅舎）

ガラスの中の小宇宙は R:planter 作。
写真協力／ studio Bow

京都大学の北にある知恩寺。地元では親しみを込めて百万遍と呼ばれるこの寺の境内では、毎月15日に手づくり市が開かれる。

1987年に「素人の手づくり作品発表の場」というコンセプトで始まり、すでに30年以上の歴史がある。暗いうちから準備が始まり、朝８時には境内に立てられたテントの下、服や小物、アクセサリー、雑貨、食品など、出店者自慢の手づくりの数々が並ぶ。芸術関係の学校が多い京都だが、その卒業生たちがここを出発点に、物づくりを生業として、実際に店舗を開く人も多い。

友禅染や京漆器、京焼、木工、竹細工など数多くの伝統工芸がある京都でも、後継者不足は大きな問題だが、手づくり市を見れば、若い力に未来があると実感できる。

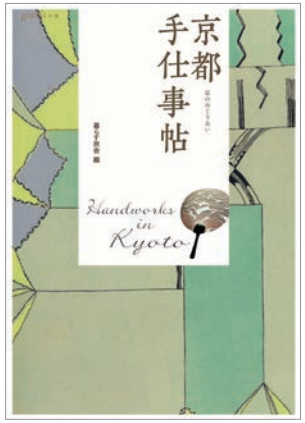
暮らす旅舎が４年前に制作した「京都　手仕事帖」では、新旧取り混ぜて京都の手技を紹介した。本の取材を通して気づいたことは、物を作る人だけではなく、それを支える人の存在。

ひと言でいえば目利きだ。しかも売る側はもちろん、買う側にも目利きが必要ということだ。美しく確かなものを選ぶ人がいて初めて、「生産、消費、廃棄」の一方通行ではなく、「作る、商う、買う、暮らす、直す」という循環が産まれる。今風の言葉で言えばサステナブルな手づくりの魅力がある。

フランス語の「アール・ド・ヴィーヴル（生活芸術）」という考えを体現するのは、まさに京都の手仕事を支えるさまざまな人々の「美しく暮らす」生き方そのものだと実感した。

街中にある友禅染の工房。

手づくりのお香も雅び。



「京都 手仕事帖」（実業之日本社）